

「その前に彼女の今を話はなします、二十六年十月忽然と姿を消した。勤務態度は我々も見習らなければならんほど規律正しかった、それが無断欠勤があった、一日はともかく二日も三日もと続いた。携帯に電話入れど、この電話は現在使われていませんと繰り返すばかり」

「で隊長はどーした」

「府中のアパートに赴き大家さんをお願いし部屋に入った、女性らしきベットあり、クローゼットにはスーツ等そのまま机には文庫本が数冊、冷蔵庫には野菜や肉にソーセイジ、棚は好きなアルコールは洋酒が数本。生活感がある部屋ちよいと出かけている様な部屋だ、大家さんは来週には帰られるでしょう部屋はこのままにしておきます。だけど引越しの連絡はない、あれほど規律正しい寺島加奈さんにしてはと。」

事件に巻き込まれたにしても可笑しい。一か月後警視庁の手前、衣服や家財道具等は国元に送り部屋を明け渡した、その際失踪手掛かりはないかと調べた、学生時代部活の合宿と称して毎年田植えした、その時に撮った合同写真が四枚と両親の写真が四枚、それに富士訓練の打ち上げで撮った写真が三枚、それと毎年、サイドボードの親の写真を入れ替えるなんて、大家さんは両親想いではなかつたかと」

両親は栃木県日光市で農業を営んでいる。連絡を入れてみた、二十六年十月に私は元気に日々過ごしていますと電話が入った、それが最後に電話は通じない、毎月の仕送りはきちんと入っているので便り無いのは元氣な証拠と気にしていないと言う」

「府中市に住んでいたなら紅葉丘周辺土地勘ありだな」

「そう見ていいだろう、しかしあの寺島加奈が一平さん等が捜査している一件と関わりあるとは想えん、女ではあるが訓練を忠実に取り組み毅然とした態度は他隊員には類を見ない、それが自ら姿を消したとは想えない」

一平は聞いた、警視庁が秘密裏に開設した特殊隊、大がかりな捜査依頼も出せんよな。

「そうなんだ、彼女は意志に反し何らかの事件に巻き込まれたとしか考えられん、一平さん、彼女を探してもらえん

だろうか」

「探しはするが偽週刊誌キャスターの名刺があるだけ捜査に支障も多い、が彼女の存在が掴めれば例の一件も大いに前進する」

と大さんは言う。

「縦割り行政、リスクを背負ってでも一平さん、協力は惜しまんぜ」

「ありがたいお願いする、彼女の今日までを話しましょう、逆さ腹筋運動を始め厳しい体力づくりと訓練に歯を食いしばり頑張り通し射撃はトップクラスとなる、ベンチプレスに難が残ったが一年後本隊員に昇格。水泳が得意と言うか好きであった、週末を利用して浜辺通い、金曜の夜行で海外も、女性にしては稀か顔は一年中日焼けしていた。容姿端麗だ学生時代、学園祭のおり美人コンテストは四年連続受賞、彼氏はいないと聞くが定かな事は分からない。笑うと眼の白と白い歯が異様さを感じさせた。特殊隊では誰彼と無く黒豹と呼ぶようになった、射撃はチョーが付くほどで空手と剣道は二段、そんな彼女が悪に加担でもされたら、そんな所そこいらの警察官など敵ではない」

「既に現金と想われる小荷物の授受に関与していると想われる、ピース王国補佐官とも密かに出会っている、小生の憶測だがあの監察官とも繋がっている筈、彼女の居所を掴めん事には。明日栃木のご両親の所に行ってみます、何か掴めるかも」

店員さんがワゴンを押しお待ちどうさまと運んで来た、テーブルに置きながら言う。

「お召し上がり方はご存知ですか、ご存じない方がおられましたらお教え致します」

一平は初めての人もいる、お願いしますと言った。

「ご飯に味噌汁とおしんこはお代わりはご自由に、ご飯に出汁で炒めた野菜の掛かったカツと一緒に食べて下さい。半分食べ終わったらこちらをピポーンしお茶を頼んで下さい、来たならばご飯の上にカツを載せ熱いお茶を掛け食します、これがお茶漬けトンカツです。以前仲居さんが余ったご飯とカツにお茶を掛け食べたとか、それがお茶漬けトンカツのル

「ツです、ご用がありましたらお呼び下さい。ではごゆっくり」

「食べながら隊長は話し始めた、

「ベンチプレスも徐徐ではあるが規定に近づいた、胸までの泥んこ歩行に耐え砂浜でのマラソンも、厳冬期雪上歩行と次々とクリア、射撃だって研修生中一、二を争う、ベンチプレスは気になるが全員一致で警視庁特殊隊隊員証が交付された。

入隊してからは週末は海オンリー、冬場はとんぼ返りで海外に、年中黒黒・・・正に黒豹、特殊隊入隊の頃富士裾野の訓練場でのこと女性トイレを始め女性シャワー等もない、男性隊員に混じって使う、皆は気を使っていたが風が悪戯してカーテンがヒラリ、後姿だがスッポンポンを見てしまった隊員が居る、水着の痕がない寺島さんを見てしまったよ、そしたら、あら見られちゃったつとあっけらん。

予備隊の頃から毎月親元に十万仕送りもしていた、それが二十六年十二月か一気に三十万になった。昇給したのではと想っていたが連絡がつかない、ではと想い親御さんは私に電話してきた、随分と出世したんですねと、ありのままを話した、頼り無いは元気な証拠と彼女同様にあっけらん」

「時期が失踪時期と被るな」

「寺島加奈が悪に染まるとは考えられない、数年ではあるがああ厳しすぎる訓練を真っ向から対峙した彼女、もしそうだったらなんらかの事情があると想っている」

「でも隊長、現在の所悪に傾き加減では」

「早い時期に栃木に行つて一平流に両親に聞き込みしてくんない」

「明日行ってみる、田植えて忙しいかな」

「そうかもうそんな時期か姿を消してから一年半になるな、何処にいるんだ」

「大さんと松ちゃんは職務の合間に大使館近辺で黒豹の張り込み聞き込みをお願いしたい、マキは府中署ガキさん

に連絡しておく、園終了後合流し寺島加奈が居住していた部屋の大家さんと周旋屋に接触してくれ、小生は栃木に行ってくる」

私は何をすればいいんだと隊長が言う。

「男友達はいないと言うが女性を含めて、いつも傍にいた隊員なら何ら聞いている事も」

「了解、直ちに隊員らに当たろう」

等々今後を確認、マキと松ちゃんにゆつくりしてきなと言い一平等は新宿駅に消えた。

早馬は環八から外環道川口JCTで東北道に入った。月曜日か車はやや多めだが詰まるようなことはない制限速度で走れる。年代物のサイドカーだ助手席から手を振る者も、蓮田SA辺りから見え隠れし追従してくるいぶし銀の86がミラーに写り始めた。良からぬ事も想像した、トイレと休憩を兼ね佐野SAに入った、86も入ってきて脇に停まった。小生と同年配らしき男女が乗っていた、ご婦人はトイレか建物の方へロマンスグレーの男性は何年ものですかこのBMWはと話しかけて来た、

「70年代だったと想うR75/5です、先輩から譲り受けたんです、二つ輪は乗った事ない暫くは車庫で眠っています、側車付けばいいんじゃないか乗れるんじゃないかとサイドカーにした次第、最初はぎこちなかったがどうにか高速道を走れるようになりました」

「私はサイドカーに憧れていたんだ、前方に見えた時は探し求めていた女に出会ったようなもの、くっ付きたかったが追いつくと想われても少し離れて付いていました」

「乗ってみると中々ドーして、言い表せん快感にしたります」

「幸せね、私もリタイアと同じして側車付ライダーに転じようと家内に相談した、サイドカーはダメ、二輪はダメの一点張り、結局昔懐かしき2TGサウンドのトレノを思い出し86になりました」
ご婦人が缶コーヒーを三つ抱え戻ってきた。

「私はこれから那須に湯に浸かりに行きます、山中と言いますあなた様は」

「谷端一平です、所要で今市に行く所です」

五分程立ち話をした、じゃー谷端さんどこかでお見掛けしたら宜しくとコーヒーを手渡された、山中ご夫妻は軽く手を挙げSA出口方向に走り去った。

握り飯と佐野ラーメンDB入りを五つ購入し早馬に跨った。日光宇都宮道に入り今市ICで降り市内を抜け大谷川を渡った所で斜め左に、緩い登り路が続き下った所に日光聖苑、その先の交差点を直進、寺島加奈の実家はすぐ見つけた、杉林の道を進むと左に平屋の屋根に立派な通気口を備えた家が見えた、ここがそーだ。確認し通り過ぎ小百の一本杉溪流釣り場センターを目指した。

板穴川の下カン橋を渡り、土日祭日は賑やかだが平日だ人っ子一人いない、管理舎へ、管理釣り場だが溪流魚の養殖が本業、餌の時間か誰もいない、そーこーしてたらバケツを持った定岡さんがいけす方向から降りて来た。

「車の音がしたのでお客さんかと想い降りて来たんだ、谷端さんではないか久し振りやなー、具合でも悪くしてたかと思ってたよ」

「ご無沙汰しています、来ようと想えば来られたが今調べ事をしている故、遠のいてしまった」

「デカ長さんは卒業したんやろ、何を調べているんだ」

「昼だ腹も減った、好きなラーメン仕入れて来たよ、すすりながら話をしよう」

「よし分かった、釣り客は来ない、上等魚をすくって来るから小屋の囲炉裏に火を頼む」

バタバタさせながらタモ網ごとイワナを持って入って来た、火はもう少しだなと言いつつ流しに十匹、定岡流捌きと塩加減、見習わなければいかなーと、竹串に挿し始めながらスミの起こり加減をチラリ。肯き最後の一匹を刺した。起きたスミに背を向け囲むように円形に、新聞紙で囲んだ。これで二十分、腹側を十分両脇を其々五分これで出来上がりだと定岡さんは笑う。

「一匹づつ食べよう、残りは何と言ったっけかなー武闘家のおねーちゃんとまりさんに」

「有難うございます、佐野ラーメンも出来た定岡さん食べよう」

DB入り土産用ラーメンとは言え、いつ食っても美味いなーと定岡さん。

こつちに来た時は買って帰るんだと一平。

「ところで谷端さんさつき言ってた調べもんで何だい、マル秘なら兎も角」

「定岡さんもご存じの筈、この下の寺島さんの娘さん」

「えれー別嬪さん、知らない訳がないだろう、大学を出て警視庁に入ったとか親父が自慢してた」

「ここでもそんな評判でしたか、その別嬪さん否娘さんが一昨年から行方不明になってしまった」

「えっえー行方不明、そらーまたどうして」

「何か手掛かりになるようなものはと来たんだ、定岡さん何か知らない」

「分る筈がないだろう、親父もお袋さんも何ら変わらん、会ってもいつものように世間話に花が」

ラーメンを食べ終えた、囲炉裏からやおら引き抜き串に刺さったままイワナをむしゃついた、串だけが残る、一平流

溪流魚食法だ、定岡さんも同様に。

「娘さんもそうだが父さん母さんも陽気な人だ、恨まれるような人ではない、娘さんだつて」

「事件に巻き込まれたと考えられんがこれからご両親に会って話を聞こうと想っている」

「小さい頃から知っている、事件を起こすなど俺には到底考えられん、一刻も早く探だし失踪究明してやってくれ、

今お昼休みしているだろう、家にいる筈だ」

真相究明の暁にはまりとマキを連れて来る、その時は宜しくと言い低いエキゾースト音を残し釣り場を後にした。

縁側でお茶を飲んでいた、寺島さん夫婦は聞き慣れぬ音と見知らぬサイドカーにキョトンとしている。メットをとりながら東京から来ました、週刊平成ルポライターの谷端一平ですと名のつた。でその谷端さんがこんな田舎に何しを

取材にとご主人が。

「お昼休み突然にお伺いして申し訳ございません、加奈さんについてお伺いしたい事がありまして」

「加奈なら東京で元気にやっています」

「それが行方不明になったのはご存知ですよね」

「はい、知っています一年程前隊長さんがお見えになり言っておりました。でも私達には一回ではあるが元気に仕事していますと手紙が届いています、送金も毎月きちんと送ってきている、仕事を変え住所を変え東京で元気に生活していると想っています。ただ気になるのは現住所が分からない、携帯も繋がらないぐらいかな」

「その時の住所は」

「桜田門でした、私も父ちゃんもあつけらかんと言うかそのうち住所も分かるだろう、電話も替えましたと連絡があるだろう位で今日になりました、行方不明とは想っていません」

「あーそうですか、ご心配ではありませんか」

「娘が大学に入った年から年に一、二編連絡があれば良い方でない年もありました。転職した今回、隊長さんに言わずらくなったのではないのでしょうか、隊長さんにもそのように言いました」

「手紙が届いたとき他に何か記されていますか」

「さつきも言った通り元気でやっていますとだけ、筆跡も娘の様です」

ほれこれがそうです、と母親が手紙を見せてくれた。

「そーですね、それしか書いてありませんね、お母さんこれ預からせて頂きませんか」

「何にも書いていない手紙ですよそれで良かったら御持ちください」

「谷端さんとやら何と言ったつけかな仕事を変わる、そうだ、とらばーゆだ、娘はとらばーゆしたのではないでしょう」
父親がのんびりとした表情で言ってきた。

「隊長さんが言うには、訓練熱心で正隊員になってからは野外訓練も積極に取り組み、男性に引けとらぬ隊員に成長した、それが仕事を変わったくらいで隊長に報告も出来ない寺島加奈ではない、なんらかの理由で失踪せねばならなかった。それを調べてくれと隊長から依頼されました」

「それで隊長さんは失踪と言っていたんだな、父ちゃん母ちゃんは明日にもひよつこり帰ったよ、両手いっぱい土産を持ち加奈が戻ってくるような」

「ご両親の言にただ頷くだけの一平だった。」

「はい、お分かりした、それ以外に何か気付いたことはありませんか」

「・・・そう言えばご存知かもしれませんが仕事が変わった直後から送金が三十万円になりました、引き落としではなくその都度振り込み用紙で送ってくるようになった、銀行もその度に変った。景気のいい会社に入った、出先で送金とは忙しいんだな」

と言う寺島さんに一平は何想うか無言、暫くして学生時代は年に数回戻ったと仰っていたがその時はと尋ねた。

「年に一回は戻ってきました、ちようど毎年今頃に、土日を利用して空手部の合宿と称し田植えに来ていました。娘が入学した年、二十数人で田植え手伝いに行くよと電話があった、その時はそうかありがたいなと電話を切った。間際になって一転した、打ち上げと称し夜はバーベキュー大会です、その日は泊り翌日帰ると言ってきた、父ちゃんもだがわしゃーびつくり、いくら旧家とは言え二十数人分の夜具などあらんと娘に言ったんだ、夜露が凌げればいいと。父ちゃんが部員らに申し訳ないが虫干しがてら押し入れに入っているのを出せばいいだろう、何とかなると渋々承諾した。娘はやったーと皆に、後ろで歓声が上がってた」

「で、当日は如何になったんですか」

「部費からだろうマイクロバスで乗り付けた、男も加奈も半ズボンに素足、怪我せにゃーとはらはらもんだった、父ちゃんが縄づり指導し苗を二、三本づつをそこに植え付けてと、上手く植え付けできなかつたり尻もち付いたりそりゃー大

騒ぎ、昼はめいめいに用意して来ていた。YY田植えは最後の一株を部長さんが植え付けて幕となる。皆は沢で手足を洗いバスより材料を下ろし始める小山の様だ。下ろし終わるとバスに乗り始めた。

父ちゃん、温泉に浸かり着替えて来るからね、それと去年雨戸替えて締つといたと言つてたよね、それ引っ張り出し掃除しといてテーブル替わりよ、夜間農作業に使つてた移動水銀灯も出しといて、じゃー入つて来るね」

「親バカか父ちゃん、足腰庇いながらブツブツ言いながら加奈の言つたように」
そんな時溪流センターの定岡さんが来ました。

「田植え捗つたじゃない」

「娘の大学の学生さんが合宿と称し田植えに来てくれたんだ、これからバーベキューだつて」

ほつほつ、そうかい意味深な顔を残して釣り堀センター方向に。庭の縁側に近い方に箱を台に雨戸を並べた、照明を庭に運びテスト完了。日が大分伸びた五時を回つても明るい、さつぱりした顔してマイクロバスから皆が降りて来る、今回のチーフだろう皆に指示を出した。転がっている石で器用にかまどを、露天の流しでは具材が大皿に、ビール等飲み物と尋常ではない量だ。定岡さんが軽トラで入つて来た、娘を見つけるなり一言二言、娘はチーフと大声で呼んだ。

「お父さんから聞き駆け付けたくれた定岡さんです、溪流魚です定岡さんが調理し焼き上げてくれます。一緒に食べて下さいと言っています、チーフどう」

「断る訳ないでしょう、お願いします」

「俺はお父さんにもお爺ちゃんにも一方ならぬお世話頂いています。そんな加奈ちゃんの仲間達、喜んでお手伝いさせて頂きますぜ」

部員さん等はサプライズとばかりに歓声が沸いた。手を挙げ歓声に答え定岡さんは軽トラからブロックを下ろしかまどを作り火をおこす。遅れ時と部員らもかまど火おこしを始めた。

大鉄板では肉にソーセージ、野菜をヘラとで菜箸で適度に攪拌、調味料を加える。サーバーからビールを注ぎ戸板

テーブルに、日が大分傾き二つの水銀灯に灯が入った、部長の発声で乾杯と相成った。部長さんが定岡さんにもどうですかと勧めたがわしゃー市内まで運転せにゃならん、皆が喜んで食してくれればいいと。

父ちゃんに手伝ってもらい三部屋の襖を外しつないだ、辛うじて一人一枚宛ての布団も、後は娘たちに任せて年寄りには静観のみ。

大鉄板からは焼きあがるが瞬く間になくなる。

「加奈ちゃん溪流魚は出来た、戸板に運んでくれ」

と定岡さんが言う。

「チーフ焼けたよ、一匹づつとって」

「オッケー、皆聞こえたら一本づつだぞ」

一度は食べたであろう溪流魚の塩焼き、皆はこれは格別と言わんばかりの顔しパクついている。その顔を見届け定岡さんは明日ブロックを片付けに来ると言い立ち去る。こっさんコールがおこった。

「この先に一本杉溪流魚センターがあります、釣りもできるし買取も出来ます、こっちの方に来た時に寄ってみたら」と加奈が言った。

山間の一軒家いくら騒いでも迷惑は掛からん、宴は延々と続いた。十二時ちよい前にトイレに起きたら鼻も聞こえるが話し声もしていた。

朝、明るみ始めると父ちゃんも起きるが外で何やら気合いじみた声が、行ってみると朝稽古ですと部長さんが前に出て気合いと共に皆で型稽古中、一段落するとわしらにオッス。大釜でご飯を炊き始めた、大鍋に鰹節と卵を数個入れ、しょうゆを加え枯れ枝を洗い攪拌、誰が探してきたかゼンマイが入った、それに里芋人参に豚肉を入れてみそ汁いやトン汁だ、すり鉢では長いもが。

特大とも言える丼ぶりが並ぶご両親様もこちらにと部長さんの隣に、娘とチーフが向かい側に号令と共に朝飯は

始まった。えれー勢いだったすぐさま皆ごっさん、新人さんだろうお茶っ葉をガーゼで包み煮え立ったやかんへ入れ頃合いを見井に注ぎ始めた。

一息入れた所でチーフが立ち上がりこれからこの予定を話し始める、かまどに使った石は焼けている片付けは寺島さんに甘えさせて頂き後は全員で対処、トイレは女子優先、今から一時間きっかりにバスは出る、遅れん様に以上、部員さん等は立ち上がり半歩開きオス！。

鍋釜、食器を洗いごみの始末、戸板や、移動水銀灯は納屋に夜具は角を揃え三つ折り四つ折り、そりゃーテキパキとえれー速さだ、我がままだった娘も見違えた様な動き、三十分しないうちに平穩な我が家に戻った。記念撮影するものや別れを惜しむかのようにわし等と語らう。時間だとチーフが檄する、部員さん等はマイクロバスに乗り込みクラクションを一声しそろりと走り出した。あんりゃー谷端さん一人でなごう話してしまつたと母さんが言う。

「その時の写真はありますか」

「スナツプの様な少人数はともかく毎年集合写真は撮っています、ほれあれだよと二段棚を指した、こつちから娘が一年の時で四年までの四枚です。父ちゃんもわしも田植えに来てくれりゃー助かるよ、来年も来てよと言ったが娘が四年の時ここに合宿にくるも最後です、お世話になりましたと部長さんより感謝状を頂きました、右端に置いてあります」

「部員さん達とその後はどうでした」

「数人の方が盆暮れにはがきをよこしています」

「それ以外に何か」

「あつそうだ、溪流釣りセンターに来たとか言つて寄つた人が毎年いますね、東京バナナを持ってほれこの人だよと集合写真の一人を指した」

「これ等の写真お借りできませんか一週間後にはお返しします」

「いいともよ」

一平は寺島さんご夫婦に余計な心配をかけてはと想いつつも性分か、有難うございます、と言い身分を明かした。「もしそうだったとしてもわたし等は驚かんよ、この通りあつけらんやご心配なく。けど早くそれらが解決すると良いや、秋には皆で稲刈りに手伝いに来てくれん」

と二人は笑う。

帰路は事故渋滞、いっぷくに着いた時は予定より一時間遅れ、西の空が真っ赤に染まっていた。

マキがダークスーツに黒革靴でコーヒーを口にしてる。

「遅かったじゃない何かあったかと思つたよ、事故つたとか」

「事故渋滞にはまちゃつたゴメン、このイワナの塩焼きは定岡さんが武道家のおねーちゃんを始め皆さんにと、それに佐野ラーメン買ってきたよ」

まりがガキさんもお腹空いたでしょう。

「後三十分もすればお客さんが来始まる、それまでに食べちゃおう。マキちゃん手伝つて、大鍋はサイホン下に具は冷蔵庫に入っているから適当に」

イワナ付きだ、時折空白もあるがラーメンすする音も賑やか、食べ終わりガキさんが話し始めた。

「先ずは周旋屋に行きました、チエーン形式が多くなつたがここは個人経営、部屋を斡旋し手数料として一ヶ月分を頂く形式で、月家賃は入居者が月末に大家さんに収める、その様なアパートでした。外語大や警察学校が近くにあり学生さんが多いと言う、この棟はワンルームマンションとして建てられました、新築とあつて瞬く間に埋まりましたその中に彼女がいた、綺麗な娘で礼儀正しかったと言つていた、卒業後もそのまま入居していたと言う」

「入居後は極一般的、何ら変わった様子は無かつたようだな」

一平は問いました。

「その通りです、次に大家さんの所に。聞くにつれ幾つかおかしな点が出てきた、アパート棟の並びにこじんまりした三角屋根の家、そこが大家さんの家でした。大ガラス窓の前に竹製の縁台があり老夫婦が腰かけ駄弁っていた、大家の草野さんご夫婦だ。垣根越しにこんにちわと声かけた。制服姿の本官を見、何事かと顔を見合わせた、府中署交通課の稲垣です、お尋ねしたい事があります入ってよろしいでしょうか、戸惑いを見せる様だつたがお入り下さい、その扉から。ご主人は縁台をもう一つ出してきて格子柄の座布団を敷きお座り下さい、その間奥さんは奥に、魔法瓶と急須に湯のみ茶碗二つ持って来た。

「老夫婦と言うと幾つ位」

「独立した子供たちが古希祝いしてくれたと言ったから七十と言った所かな」

「小生と同じ年じゃないか七月には七十だぜ、それなのに老夫婦とは」

「あいたーゴメン一平さんは若いよ、草野さんとは十違いに見える」

「そこまで言う草野さんご夫婦に叱られるよ、まいいやー聞き取りはどー進んだ」

「交通課ですが本庁の友人が職務上必要になった、行方不明と言うか失踪か不明だが寺島加奈の居住中を大家さんに会って聞いてほしい、そんな訳で来たしだい、こっちは刑事さんで村上眞希、まだ経験がない私の聞き取り調査を目の当りにしたいと言うんで連れて来た」

「おばあちゃんたらこんな事言うのよ、チャーミングな刑事さんだ事、彼氏がいつぱい居るんでしよう、選り好みするんじゃないよ。テレビでやっているじゃない、悪をバツタバタ捕まえる女刑事、そんな風になるんだよって」

「なんと返事した」

「彼氏じゃないが仲のいい老いぼれ元刑事がいます」

「小生老いぼれかよそんな事言ったのか、つまたくー、どーりでその衣装かマキがデカ真似かよ、迷惑かけんかった」
グッドマーク、一平さん実戦でも立派に通用するよとガキさんが言う。

「で、何か気になる事がと」

「入居者さんを監視するでないがじいさんとここでこーしてお茶を飲んでいると皆が眼に付くんだいな、入居当初から笑顔が絶えない娘さんだった、人其々かも知れないが挨拶は必ずするしアパートの周りで草むしりしていると素通りも多いがあの娘さんは必ず声かけてくれる、家賃は十五日前後には必ず持つてくる、出かけたと言ってお土産も」

「大学時代はブーっとそうだったのか彼氏とかは」

「一平さん、家賃が遅れた事は言っていない、彼氏や彼女を連れて来る者はいたが知っている限りではいなかった、ただ海が泳ぎが好きなんだろう、外国にも行ってたようので一年を通じて黒い顔していた」

「うーむー特捜隊に入ってからだな」

「卒業を迎えと退去が普通だがおじさんお婆さんが好きだよ部屋も気に入っている、このまま入居させて下さいと言った、あの笑顔がこれからも見られる、じいさんは一つ返事でした」

「警視庁勤務、任務も様々なのか夜勤が多いとみえて帰らない日もあった、で一平さんとガキさんは改まった、二十六年十月だったと想う、男と戻り部屋に入った、珍しい事もと想いつつも日が陰り雨戸を閉めた。その後の事は分からない、いいか一平さんその翌日にあの娘さん寺島加奈は消えたんだ」

「その男の人相はどうだったか大屋さんは言ってた」

「又もやと一平さんだが、あのキザ監察官似なんだ、記憶は薄れていて定かさにかけるがパイプを啜えてスーツを着ていたが柄、色は不明、靴は黒光りしていたがサラリーマンでも光らせている人は多い故決め手に欠ける、が黒縁メガネにソフト帽、一平さんどうだい」

「限りなくキザ野郎に近いが」

「しよつ引いて事情聴取してみましようか、意外に吐いたりして」

「あまいな、先も言ってたように決め手に欠ける、シロだったらリスクが高すぎる」

じゃーどうすりゃーいいんだ、一平に向かい直しガキさんが想い出した様に言い出した。

「おばあちゃんの話だと失踪後寺島加奈らしき人物を紅葉丘で見かけたと言う、茶飲み友達の帰り、つけまつげを化粧濃く白のトンボメガネ、つばびろの帽子を被り、男物かだぶだぶなズボンに大きなジャンパー着込んだ女性とすれ違った、どことなくあの娘の面影が、だけど色白だしあの娘だったらこのバーさんを忘れは知れんだろう、挨拶もしてくるだろうやっぱ人違いだなと行き違いした。その時入居中は使用していなかったと言うか気が付かなかったが香水の匂いがした、とおばあちゃんは言ってた」

「うーん香水、ネイルだのつけ睫毛だの今女子には普通だ香水つける娘もいるだろう、だが彼女が香水の匂いをさせていたとは隊長は言っていなかった」

やっぱし別人かなとガキさん。

「決めつけるのは早いがそー想いざるを得ないな」

一平は暫く無言でいたが徐にガキさんに話し始める。

「これ等四枚の写真は空手部合宿の集合写真だ、寺島加奈が在部中の四年間のものだ、ヒットはせんと思うが照合してくれんかな」

鑑識に出してみようと言いつつコーヒーを空にした。どやどやと今風な装いの女性が五人入って来た、府中署総務課と交通課の署員だ。

「稲垣巡查長、いなくなつたと想ったらいつぶくに来てたのずるいよ、声かけてくれれば良かったのに」

「あいやーすまん、コーヒーとサンド、俺持ちにするまりさん頼む」

「やっぱし巡查長ね、ごちそうさま」

「それにしても署を出ると何時もそういつたお召し物かい」

決まっているでしょうと皆はその場回り、ガキさんはおううーと発し向き直った。

一平はマキと高尾駅北口を出た、社寺風駅舎は昔懐かしい、中学校時、裏高尾陣馬山等遠足にキャンプに行くとき使った駅だ、以前は浅川駅と言っていたがいつの間にか高尾駅になっていた。鳥観察の八王子城跡での開催日で首謀者は叶山拓也さんだ、駅前からバスで十二、三分で集合場所のガイダンス施設に着いた。サンコチョウが見られる、サンコチョウが営巢中と先生は言い抱卵している、雌雄が見られるがあの枝に蔓延っていて一枚葉が邪魔するも確認できた。マキがそんな事言っただけで何処、見つからないとブツブツ、先客の鳥撮りさんにお伺いした。あのスギかな太い木、それに番号プレートがあるその高さで僅か眼を左に、そのまま奥に、暗い三角の様なもの、それが営巢中の巣です。マキは礼も言わずに双眼鏡で探す、お嬢さんその場では無理あと一メートル左に立たんと鳥撮りさんは言う。暗がりだが肉眼で確認できたマキも見えたと発した、ここで有難うございます。

今度はピントが合い難い、マニュアルにすれど今一の画像ばかりだ、結局アメリカの母で雌を数枚。サンコチョウはマキに任せて昆虫撮り、オオミズアオやトサカグンバイ、ヤツボシハムシ等をゲット。

お昼にしましょうと先生は言う、管理棟前でめいめいに敷物を出しランチタイム、頻りと先生が小生等を見ている、マキルックはお馴染みだから見ても違和感はない筈ではと、マキが特大のおにぎりを出しパクついた。

「マキちゃん今日のは一段とでかく見えるよ」

「あら先生、見られちゃった——一段と美味しいよ、中はオカカにタラコに梅干しの三種類が入っています、今日も自分を作った一平もおなじもん」

「そのでつかいと言うか爆弾おにぎり、鳥撮り仲間では評判だよ」

なんだったら次回の観察会に作ってあげようかとマキが。

「私は妻の作った手頃な大きさに充分だ」

「つくってあげんに残念ね」

とマキが言うと同じしてルパン三世が喚きおった。

「昼時、おくつろぎの所電話すまん、例の集合写真は言った通りヒットしなかったヒットは寺島加奈だけ、警視庁職員じゃしょうがない。だけど一平さん、香水をつけた女、オフ日に限ってだけど調査してみる、この女は紅葉丘で小荷物受け取りに関与しているじゃーないか、寺島加奈だったら尚更、土地勘はあるし受け取りに昨年から今年にかけて四回は来ている、一平さんどうだね」

「ありがとう、やっぱしヒットしなかったか、でも香水の女、小生もそー想っている頼みます」

「吉報、出来る様頑張りますぜ」

ガキさんからの電話を切ろうとした時、先生が空を見ると言う、ハチクマだ悠然と上空を飛んでいる、先生はあれれーと、間あつてすまんあれはノスリと訂正。キビタキの雌雄や見えはせんだったが東京特許許可局とホトトギスも良く鳴いていた。画像は今一続きだったが会員さんらの楽しいトークにジョーク、終わり良ければ全て良しマキの表情は和んでいた。

午後二時過ぎ解散、次回の観察会日程を確認し高尾駅に向かった。快速が入っている、時間帯なのか空いている、冷房が効いているんだらう微かに涼を感じる。

「ねー一平、吉祥寺に寄って行こうよ」

「寄ってどーするんだ」

「中途半端な時間だけど一風堂に行こうよ、ラーメン食べちゃくなっちゃった」

「言ってもいいけど土曜日だし混んでいるんじゃない」

「ウウン待つのが嫌いなんだから、混んでたら待てばいいじゃん、階段の降り口ぐらい迄並んでいったって三十分かかないよ」

「相分った、行くとしよう」

だから好きよと向かえ席に聞こえるよな声で言い、困惑する一平をしり目に腕をとりなおも引っ付き頭を肩に凭れた、疲れたのか立川を過ぎたあたりで寝息が。

店は地下にあり中程で階段が左に曲がっている、曲がるちょい上まで並んでいたが十五分と待たずして席につけた、ラッシュイ、店員さんの威勢のいい掛け声、メニューがサツとテーブルに。

「自分は赤丸に餃子、一平は白丸に餃子でいいね硬さは普通で」

ここでの主導権はマキが握っている、一平の返事待たずして店員さんに告げた。

「久し振りだねこのラーメン、自分の食生活の一つだと一平は」

「時と場合にもよるが和洋食だのラーメンだの爆弾おにぎりもかな、腹が減ったらその時その場で食べる、小生しいて言えば焼酎にレミーマルタンかな、マキもソージャーないのか」

「それらは周りの人は皆知っている、あえては言わない」

等々言いながら食べ終え地上に出た、画像処理しなければとバス停方向に向かう、マキはぶらぶらしてくと駅前からサンロード方向に、明日は本庄だと言いまきと別れガードに差し掛かった、ルパン三世だ。

「一平さん俺だ高輪署の大泉だ、今話してもいいか大丈夫か面白い情報を入れるが」

「大丈夫お願いします」

「どつちから話そうかな、監察官の元情報屋の一人、室井禎一から行こう。連休明け非番だ当てもなく白金をぶらぶらしていた、そうしたら日焼けしたんだろう室井が赤黒い顔をしてコーヒーショップに入るのを見俺も、待ち合わせでもなくスマホゲームに熱中、小一時間ほどで出た。白金高輪駅改札に、俺は後に続いた。目黒で下車、山手通りを横切り五分ほどの所に八階建てマンションがあり中に入った、玄関ホールがあり見ただけでも豪華さが伺える、二人の情報屋は共に豪華マンション住まいだ。

もう一つは白金駅近くの路地を入った所にコンビニがある、以前はタバコ屋だったが子供の代になってからコンビニに変

わった、が九十を超える爺さんだが元氣印を背負っていた、毎日レジに立っている。相谷監察官らしき人物と寺島加奈似の二人が来たと言う」

「それはいつ頃の事かな」

「いいか一平さん驚くなかれ二十六年のクリスマススイブの日だ」

「一昨年の事を覚えているとはしかも日にちまで、元氣印の爺さん大したもんだな」

「なるべく空いている時間帯を利用して行ったんだ、レジには爺さん一人だけだった、この女性を御存じないだろうか？例の似顔絵を見せたんだ、暫くははてなーと宙を見るとか絵を見るとかしてたがこの女あのツツパリと一緒にいた女だ、つば広の帽子を被り地味なコートを着、髪は胸と背に垂らし浅黒い顔をしてた、尚且つこの絵の様にマブイ女だったよ」

「大さんも死語的言葉を良く知ってたな」

「良く知ってたんじゃない？爺さんが使ってた」

「それだけで一昨年の女を想い出してくれたのですか」

「あいやー待たれい、そうじゃーない、ツツパリの男だよ、入ってくるなりパイプが切れた刻みをくれと言ってきた、あいにく今はこれしかありませんと一包み出した、何だこれは私が愛用しているのよりだいぶ落ちる、これしかないのかと言いつ張る、無い物はないと言うと仕方ないなそれでいいと、ここまでは良いんだがあのツツパリ、パイプのカスをレジのレシート入れにポンポンしやがんの、今は爺さんだが昔は何とやらだ、休憩を終えたバイトさんが右腕を押さえ有難うございました、またおいで下さいませ、品が揃っていない店なんぞ二度と来るかもんかと捨て台詞。爺さんは怒り心頭、塩でも撒いてやろう奥に取りに行った、だがバイトさんにお客様です押さえて下さいと言われた、そんな事でようく覚えていたと言おう」

「その男がどうして監察官だと」

「ソフト帽は被っていないなかったが縦縞スーツに黒縁メガネ、黒光りする靴にパイプたばこ相谷監察官以外に誰がいよ

う」

「今までの話から二人に相違ない、相谷と寺島加奈が失踪間もない頃出会っていた、どー想う」

「特捜隊では優マークな彼女、二人の接点は何か、傍にはピース王国の大使館がある何ら関係しているのではと俺は推測したんだ、乗り込んでみようか」

「気持ちは分かるが今はダブー、小生も何時もそれは口まで出ているんだが時期尚早、彼女は府中に住んでいた頃モスグリーンのBMWに乗っていた、府中からそれも消えている、合わせて調査してくれ」

「了解、松宮とこの辺を更に張り込んでみる」

「ありがとう、そーしてくれ」

画像の整理は終えガレージに行った、明日は埼玉県本庄でサイドカー走ろう会の日だ。さほど汚れてはいないが早馬口を整備がてら洗車、本体右と側車右に付けた四つのクラブバーと足元に外側に向けた二つのステップ、これ等はマキに合わせてある。ガタはないか入念にチェック、明日の走ろう会はこれ等を駆使する。

サイドカーは自動車扱いなのでヘルメット着用の義務はないが一平はフルフェイス被るのが常、何故なら顔を見られるのが苦手だと言う、マキはノーヘルが多い、そんな二人を乗せた早馬口は254児玉バイパス手前で左折、そこから十分でサーキットに着いた、集合三十分前だが走ろう会の面々は揃っていた。

「一平さんマキちゃんも久し振りやないか腕が鈍ったのと違う」

「ご心配には及びません、パッセンジャー感覚は衰えていません、磨きかかっているかもよ」

「そうかマキちゃんの体重移動楽しんでいるよ」

パドックでミーティングが始まった、とは言っても走行時間の確認と安全運転の心得等だ。めいめいにコーヒー飲んだりライダースーツに着替えたり時を待っていた。走ろう会は始まった、マキがカラフルなフルフェイス被りパッセンジャー席に座りクラブバーとステップ確認、準備完了と一平に告げる、了解。今日はスピードあげるの声と共にBMWサウンド

を残しコースに、全長1、128メートル直線は二か所あるがR12から24のコーナーが十一か所混ざる、最初の二週は慣熟走行を兼ね一般道路並み。

「さースピード上げて行く用意は言いな、クラブバー掴むタイミングを」

「掴み、体重移動すればいいんだね」

「左コーナーだ、車体右のバーを掴み体重を小生の方に、そーだ上手いぞ」

「一平にしがみついた方が楽」

「ばかたれ、スピードもさほどでないが凹みでもあったら放り出される、バーを確り掴み体をぴったり小生の後ろに」
「こんな感じ」

マキは一平の右肩から背に胸を押しつけた。

「そーだそんな感じだ、今度は右コーナーだ移動する、バーから両手一遍に離さず片方ずつ離し側車バーを掴むいな、さー行くぞステップに足乗せ踏ん張り両手でバー掴み側車の外に出るように、そーだ良いぞその感じだ」

三十分は瞬く間に過ぎた、各自休憩し二回目の走行に備えた。会長さんがお疲れさま良い走りしているとマキを褒めた。レーシング仕様はともかくサイドカーを停める曲げる走らせるはライダーの仕事、一方パッセンジャーはクラブバーを的確に掴み替え体重移動しコーナーリング性能を上げるにある、四輪以上のスピードでコーナーリングが可能と言われる。あそこのR80はこれと同じ右測車、二回目は後ろについて行くの良いパッセンジャーの動きがよくわかる。ライダーとパッセンジャーさんをお願いしますとマキ、二人は親指を立てた。

二回目走行は始まった、最初は右に左に体を傾けるだけの様なスピード。徐々に上がり始めるさすが北野流の使い手マキだ覚えが早い、一平の言った事を忠実に守っている、更にスピードが上がってきた。

「もっと小生にくっつけ転倒するぞ」

マキは無言で一平の左肩からメットが出るまでに背に胸を押し付けた今度は右だ、R80は上半身が側車から出て

いる。

「マキもつと外に出る車輪が浮くぞ」

一平のアクセルワークで切り抜ける。

「左があつてその先に右がくる、前をよく見て体重移動のタイミングを掴め」

無言だがこつくりする、R80がコーナーに入った、側車脇がU字している、そこから上半身を出し真横に身体を真っ直ぐにする、後輪がドリフトしている様だ。マキも必死で役目をしようとしている。

「次がある挑戦のみだ、左は小生にくつつく事で覚えた、右は離れる事を覚えねば、足を突っ張りグラブバーを掴み出
来る限り小生から離れるように」

「そんな事言つたつて一平から離れんよ」

「相分かった、マキそれとこれは違う今は離れるのみ」

必死で側車から身を乗り出すマキ。

「良いぞその調子だ、追いついて来たぞ」

上達したかR80がスピードを落としたのか離れず迄になった。

昼食を挟さんで三回、四回と走行し本日の走ろう会は終了した。

帰路R254を走っているとマキが言い出した。

「リヤが横滑りしてたよ、あんな走りして早馬口は大丈夫なの」

「間もなく定期点検だ、毎回出す事になっている消耗品は交換し細部まで点検、こーすりゃー少々ラフに乗つたつて
愚痴はこぼさんよ」

「自分は脚と腕が、明日は筋肉痛になりそう何か気付け葉ない」

「分かったよ、抽選で当たった森伊蔵あげるよ」

「やっぱ一平ね、ごちそうさん」

マキは走ろう会が終わわりホツとし疲れも溜まっているだろうに、だが今日に限らず一平を想うてかパッセンジャーシートでは決して転寝しない。

梅雨に入ったとある日の夕刻、三鷹署に黒塗りの車が入った。ドアが開き黒光りした靴が出た、相谷監察官だ、庁舎警備官の敬礼に眼もくれず署内に入った、まっつぐ署長室にノックもせず傍若無人も甚だしい。

「監察官、この時間にどうなされたのですかお茶を入れます、こちらにお座り下さい」

「以前ここにいた谷端捜査課長、こ奴が昨年、キスゲ橋で起きた転落事故を調べている。何の為だあれば本庁で解決済みだ、元刑事課長と言えどもこれ以上首を突っ込むとろくな事はないと言っとけ、彼とは連絡は取り合っていないだろうな。今後何らかの方法で連絡してくるかも知れん」

「その件は府中署の管轄です、連絡するとすれば府中では」

「そんな事は言われなくても分かっている、谷端から何らかしの連絡が入ったら直ぐ一報入れろ、捜査課長は何て言っただけかな、あそうだと村上課長にもそう言っとけ、それから署長、来年は退職だそうな、くだらん事で棒に振るなよ」

「私の仕事は人々の安全と真実究明に在ります、ただそれだけです」

監察官はむっとした表情して署を後にした、署長は捜査課に赴く。

「村上課長、今、例の監察官が来て監察官あるまじき口調で喋っていた、それなりに相対しといた、皆にも突っかって来るかも知れん、それなりに聞き流す様に。一平さんの捜査は七合目ちよい手前と聞く、今まで通り情報は全て一平さんに、それから監察官が来たと連絡しといて、マキちゃんにもそれとなく」

「了解、課員に伝えておきます」

マキは大学時代の仲間と新宿での女子会の帰り、吉祥寺駅より何時もの様に徒歩で道場のある北野に向かった。いせや公園店前を抜け井の頭公園池へ、池に沿って左にひょうたん池方向に向かった。汗を感じる季節だが小雨降

りしきるゆえ人は皆無に等しい。池への階段を降りる辺りから背後に人を感じていた。

マキは超ミニの夏バージョンで静寂を破るが如くピンヒール音をカッカツと靡かせモデルさんウオークで歩を進める。ひょうたん池手前で黒衣装のマスクマン三人が立ち塞がった、自分に何か用ですかと言うが早く襲い掛かってきた。ミニ傘を飛ばし更に何故に、三人は要しなく鉄拳や足蹴り、マキはもう黙っちゃーいられない応戦する、柔術道北野流が炸裂する、跳躍し足蹴りをかわす、鉄拳はひよいと横に払う、襲い掛かるマスクマンの顔面に足蹴りや前足蹴り、はたまた頭上高く飛び後頭部に一撃、体勢を立て直しマスクマンは必要に迫って来る、背後にある横枝にひよいと掴み大回転、あつけにとられて二人目掛けて頭上から其々額に足蹴りがヒット、北野流は空中戦が真髄、だが超ミニのせいか女としての恥じらいもあるう動きが今一つ。

そんな光景を目の当りにしているカップルがいた、二人はおどおどするばかり。首領閣だろう足を狙えと叫んだ、跳び降りようとした脚に枯れ枝が飛んで来た、マキは体勢を崩す、脚を攻めら動きを止められては、今だ、体格のいい一人が背後から腕を首に回した残り二人が両脇から腕を固めた、満を期したか二人は所かまわず鉄拳や足蹴り。おどおどしていたカップルが何を思ったか火事だー火事だーと叫び続けた。何処にいたのか火事はどこだと近所衆が集まってきた、まずいと言い男三人は吉祥寺南町方向に去った。

蹲っているマキに何があったどうしたんだと口々に、井の頭公園駅前交番からも当直が駆け付けた。警察官に事情は話し始めた。腕と額から血が出ている他に打撲傷あるようだ警察官は救急車を要請した、名前はの問いに三鷹市北野居住の村上眞姫ですと答えた。

「それにしてもお嬢さん男三人に立ち向かうとは、うっむ、北野お住いの村上さんと言えばあの柔術道北野流のお嬢さんでは」

「はい、道主は村上一太郎で孫の眞姫です」

「どうりで目撃者によると黒づくめの男三人相手に互角に戦っていたとか」

「はい私達が一部始終見ていました、が怖くて手が出せませんでした、小さい頃親が言っていた人殺しと叫ぶより火事だーと叫んだ方が人は集まってくれる。そんな事を咄嗟に想いついて叫びました」

とカップルは震え声で警察官に説明していた。

三鷹病院の一室に父裕太郎が駆け込んで来た、至る所に絆創膏や包帯でグルグル巻きのマキがいた。

「マキ大丈夫か災難だったな」

「痛みはするが打撲傷だけで骨折は無い、直ぐ退院出来るって」

「父っ様は事ある毎に良く言っている、暗い夜道は避け明るく人通りの多い道を歩くと、夜はあのルートはやめるんだな、それに肌諸だしの衣服はなんだ襲ってくれと言わんばかりだ」

「今女子のファッション、余計なお世話だ父っ様は黙ってて」

定時見回りに来た看護師さんが笑いを堪えている様だ、そんな親娘の会話をしていると遅くなりましたと一平が入って来た。

「一平、遅いじゃないのもう父っ様ったら煩くて敵わない何とかしてよ」

「お父さんにそんな言い方いけないよ、心配していち早く駆け付けてくれたんだよ」

「だけど明るい道を歩けとか裸で歩かって襲うなどという方に無理があるとか」

「以前どつかの知事さんも同じ事を言ってたな、でも大事なき良かった」

裕太郎は取り合えず被害届を出しておこう、私今日は当直です、署に戻ろねばと言いは一平に託して病室を出て行く。マキはやれやれと言った表情で一平を見た。

落ち着きを取り戻したかマキがしゃべり始めた。

「あの三人はいせや公園店辺りから着いてきたようだ、先回りしたかひょうたん池の橋の上で三人は仁王立ち、それからと言うもの無心で争った。足を止められ首を絞められ両腕を固められた、キンテキも考えたが上手くないから、間

入れずキックにパンチが所かまわず降って来た。火事だーの声で救われた」

「暴漢達の特徴、なんか覚えてない」

「黒の眼だし帽だが首領格は監察官の元情報屋の一人に背格好は似ている、他の二人は俗にいうチンピラ風、首領格を兄貴と呼んでいた」

「情報屋似か、今日三鷹署に監察官が来てキスゲ橋の一件は解決済みだ、これ以上突っ込むと何人もろくな事はないぞ、関与しないようにと言ってきたらしい。それと関連性はあるかな」

「あいつが手配したんだよ決まってる」

「決めつけは早い、お父さんが三人等を手配したそのうち分かる、それ以外に何か」

「首領格は殺すな痛めつけるだけでいい、チンピラ風はこの女えれー強えー、補佐官が連れて来た女といい勝負するんじゃないーねーかとか、一平あの強い女って」

「寺島加奈と被るな」

のりが花と特大なピザと共に現れ窓際のテーブルに花を生けた。お腹空いたでしょう、看護師さんが出て行ったのを見計らい適度にカットし食べよう。

「この時間じゃーもう食事はでない、いっただきまーす。一平もお腹すたでしょう食べよーよ」

「院内でやたら食事をとっていけないのでは」

「堅い事は言わない、自分は幸いにして食事制限はない、何でも食べられる」

ピザの匂い残るんでは、看護師さんに分かってしまうとやいっつと渋々ながら一平も口にした。面会時間は終わった、のりと一平はまた来ると言い残り病室を出た。

パッセンジャーシートに座り送ってとのりは言う、初めて乗る早馬コルンルン気分の様だ、ついでに一回りお願い。南浦からむらさき橋を抜け井の頭通りを右折、立教女学院をコの字に回り三鷹台駅にその先の路地を左折、僅か行く

と右に見えるの三階建てがそうです。その前で降りハイタッチし又ね、似れば似るもんだマキの仕草が似て来た。

就寝時間はとうに過ぎている、いっづくも明かりが消えている二階に通じる階段を登り始めた、足音に気付いたかまわりがおかえり、マキちゃん大した事無くてよかったねとまり。

「あの女、打たれ蹴つ飛ばされたってそんな所そこいらにいる女とはわけが違う、包帯グルグル巻きにされたってピザたらかふく食っていた」

「でもその浮かぬ顔は」

「暴漢者は黒ずくめのマスクマンが三人、首領格は監察官の元情報屋似らしい、マキのお父さんが捜査に入った、そのうち明らかになるだろう、いぶり始めたら出てきおった。ここにも来るかもしれない、来たらどーする」

「何を仰せになります、以前も言ったように私を誰と、元八方面では違反者に恐れられた鬼の白バイ隊員でもあり元刑事の恋女房です、何があるうと屈しない。マキちゃんだってそうだよ見て分かったでしょう」

「おーそうか安心した、もーやめてこれ以上被害が増えるといけないからとでも」

「一平！先も言ったでしょう、私の腹は出来ているって真相究明に努めなさい、シャワー浴びて来たら日付も変わってしまう、レミーマルタンの飲む時間なくなるよ」

翌朝、幼稚園に赴きマキの状況を麻耶教頭に伝えた。

「マキ先生の分は私が頑張ります、養生に努めて下さいそれに今日幼稚園終わったら顔を見に行きますと伝えたいして下さい」

「多分今日はお父さんが見舞客の相手をしてしていると想います、小生も夕刻に行く予定です」

「マキ先生の事、退屈しているんでは」

「一週間もすれば退院出来ると言っていたがマキの奴よからぬ策を模索しているのでは」
よからぬ策とはと麻耶教頭が。

「早く言えば脱走、お父さんにくぎ刺されてた、退院まで付きっ切りで見張るそうです」

「マキ先生が考えそうな事ですね、私も終わったら毎日行こう脱走のチャンス与えないように」

「そーしてくれるとありがたい、小生も限りなく行く予定にしている」

夕闇迫る頃病室ではお父さんとマキが話している、話していると言っても言い合いに等しい、今日にも退院したいらしい、治った治らないの攻防だ、一平が病室に入った。

「一平退屈だよ退院させて、もう大丈夫だよ」

「その包帯と絆創膏じゃー、先生や看護師さんの話をしっかりと聞いていれば早く退院出来るかも」

「痛くないもん」

窓側に向き横になり、布団を引っ被ってしまった。

一平さんおとなしくなった様だ、なっていないよーだ、布団の端からマキの声が。

「先程鳥撮り仲間の野萱さんが来て下さいました、ありがたいマキの症状を詳しく聞いていました、早く良くなって鳥撮りしようと。また獺祭二本お見舞いと称し持って来て頂きました。一本はマキに後一本は一平さん用だそうです。マキちゃんに飲まれてしまった、味のコメントのしようがないと聞いたので持って来たと言っていました」

布団の中から一人で飲んだんじゃーないもん三人だもん、野萱さんにコメントしといたもん。

お前はおとなしく寝てなさいと村上捜査課長が言う。

「そんな訳で一本はお持ち下さい」

「有難うございます、そーさせて頂く」

一平は布団の上から退院したら一緒に飲みコメントし合おう、はーいと何時ものマキの声が布団の中から返ってきた、お父さんはゲンキな奴めと言った表情。

七時過ぎた頃、麻耶教頭が三人の先生と入って来る。

「マキ先生 元気印じゃん、顔色も良いし一安心子供達には元気だと言っとくね」

「教頭先生、ご迷惑をおかけして申し訳ありません、また大勢でお見舞い有難うございます」

村上捜査課長が先生方に頭を下げた。

「マキ先生、子供達が早く良くなるようにと書きました、一生懸命書きました見て」

せんせい、がんばってとかはやくよくなって、いっしょにあそぼうとか字もただとさしき多分なれど子供達の思いが伝わる。

「マキ先生が一生懸命教えてくれたのでこれまでにりました」

一、す、二、り、せんせい、一平はこれ何と書いてあるのかと用紙を手を取った、マキが上半身を起こし見た。

「これはまきせんせいと書いてあります、邦夫君は頑張りここまで書いたと想います、卒園するまでにはしっかりと書けるようになります。(一)と(す)で「ま」です、(二)と(り)は「き」です、机の脇で目線を合わせるように腰を落とし、これをつけて書かないと文字にならないよと言おうと」

「離れた方が書き易いんだものといつも笑うんです、一平これが何か」

「それと同じではないが依然見た事がある」

麻耶教頭が言う。

「それはマキ先生にお任せしましょう、でも先生が想ってたより元気で良かった」

先生、元気過ぎて困っているんだ、脱走を企てている様だとお父さんがボソボソ。

「父っ様それ言わないの」

「教頭先生には言っといたほうが言い聞いて下さい、入院したその日から退屈事ばかり、いつ決行かヒヤヒヤもんです、無論帰って来たって追い返すだけだが」

「お父さんその心配はございません、マキ先生は人一倍脱走には厳しく対処しています。保育をさぼりブランコや滑り

台で遊んでいようものなら怒り怒らずで対処しています。それはマキ先生の特権であり私には同じようには出来ません、そのマキ先生が脱走など」

「父っ様、だから言ったでしょうそれは言わないでって」

一平と父っ様は想わず顔を見合わせ父っ様がしゃべった。

「教頭先生のお言葉を聞いて安心しました、これからも宜しくお願いします」

「マキ先生はお父さんがどう想っているかは存じませんが先生方の良きお手本になっています、あー長くお邪魔してしまいましたそろそろお暇します。明日も来るね来たらいいと淋しいから脱走しないでね」

「教頭先生！」

村上捜査課長は見送りに玄関まで行った。

留守を利用して一平はマキに語った。

「邦夫君が書いた文字、あれと同じようなのを見たと言ったよな、昨年五月キスゲ橋の転落事故、翔平さんの脇に血で書いたと想われる(リ)と(乙)、くつつければこれは日と白と想われる。頭部を強打、生死をさまよい意識朦朧で書けばこのようになるのでは、小生推理するならそこに日と白の付く人がいたと。それはピース王国の補佐官白家だ、キスゲ橋下をガキさんが調べた、ラジコン電池とレディガガブランドの香水瓶が落ちていた、其々を使用する二人がいた、つまり三人だ。」

この三人が事故死いや殺人に関与している、マキどーだ小生の推理は」

「自分が襲われたのと繋がる」

「今までの捜査からしても限りなく黒だ、繋がるとも転落死の一件は監察官が強引に解決済みとしたし、繋がる」と

「じゃーしよっぴいたら」

「今の小生にはその権限はない、警察手帖もないんだ」

「じゃーガキさんや大さん達にお願いしたらどうなの」

「いつだかも言っただろう、ずるがしい監察官の事、万一の為に策はとっているだろうし、証拠も乏しい、まかり間違えば大さん達の更迭も在り得る、現段階ではリスクが多い。待つんだ、更に確かなる証拠を掴まんな、それにはマキの手も借りなければ、早く直せ」

見送って来たとお父さんが程って来た。

「お父さん、マキちゃんはお聞きの様子に保育に関してピカイチだ、見る眼を変えて下さい」

「マキの奴、内じゃーそんな事一言も言わん、俺の悪口ばかりだ」

「以前から言ったって、相手にしてくれんじゃん、だから言わんのよ、洗濯物を片付けようと部屋の片隅に置いておいたら自分の下着を異様な目付きで見てるだけじゃん」

お二方ともこれからだ、その辺で終わりにしましょう、と一平が割って出て明日また来るよと。

九時を大分回っていた、後片付けをしているのかいっぶくに明かりが付いている、二階には上がらず立ち寄った。

「あつお帰りコーヒーにするそれとも」

「それともにする」

「マキちゃん元気で良かったね」

「それはいいんだが元氣過ぎて退屈、拳句の果ては脱走を企ていんの、困ったもんだ」

「私、明日開店を遅らせて行くつもりです」

「そーしてくれ今にも抜け出しそーだ。園児達が早く元氣になって先生に会いたいと寄せ書きを教頭さんらが持って来た。その中の一枚に転落死した翔平さんの脇に血で書かれたと想われる(り)と乙(これを解くヒントがあった」

病室で言ってた事をまりに話した。

「小生はそれは白の文字であり、白家補佐官を指すと推理した、どー想う」
言われてみればそう読める、けど白石や白川といろいろありますとまりが言った。

「翔平さんの身近では白家しかない」

「一平が言い出したら例え上官だろうが曲げないのは分かっている、今日はその位にしてシャワー浴びたら、一平時間はとうに過ぎています」

レミーマルタンを飲み干して二階に上がった。

一平は翌日三鷹署刑事課にいた。

「久しぶりやないか時たまお出で下さいよ、武勇伝でもお聞かせ下さい」

と飯島係長が話しかけた。

「キザ監察官が来たって我々の士気が下がるばかり、一平さんなら逆だよ」

昨日は署長室で悪たれつたと口々に。

「誰があんな監察官の言う事聞くもんか」

今日も課長は病院に行っています、と言いながら婦警さんがお茶を入れてくれた。

「当日夜から武蔵野署と合同で聞き取り捜査しています、課長の指示で田川健二郎も調べていますが最近は何目撃情報はなしです、白金のたいそう立派なマンションに越したとか」

一平が言う。

「白金で目撃情報が高輪署から入っている、引き続き吉祥寺近辺の捜査をお願いします」

「了解しました、暴漢が情報屋の田川だとしたら一平さんやまりさんにも危害が気負つけて下さい」

まりは重々承知、これから小生も吉祥寺に行ってみようと想っている、気負つきますと言いついで捜査課を出て行く。

開店準備だろう、パチンコ店の内に外で細田誠一は忙しなく動き回っていた、開店すれば暇もあろう、邪魔な雨を

遮れる庇を見つけ待つ事にした。

誠一、久し振りやなの声の振り向いた。

「うおつ、デカ長さんやないか今日は何用でっか」

「真面目にやっつてんか見に来たんだ、暇あるか」

「店長に所要で三十分、時間下さいとお願いしてきます、デカ長さんに言われちゃー断れないでしょう、直ぐ来ますからここで待っていて下さい」

お待たせしましたとジャンパーに着替え出て来た、この先を曲がった所に軽食店がある、そこに行きましようと案内するよう先を歩き出した、二人は店員さんにサンドとコーヒーを頼んだ。

「ここん所数日デカさんが多い、売り上げも減り気味です。情報屋の田川とチンピラ二人を探している、ここかしこに制服警官や刑事が多く後ろめたさがある客は遠のいてしまった、田川の奴め傷害事件なんか起しやがっていい迷惑だ」

「ほほーそんな情報が入っているのか、話が早いその田川の件で聞きたい事がある」

「へい、何なりと知っていることは何でも」

「その田川は最近はどうだい」

「とんと見なくなちいまったな、白金の高級マンションに引っ越したとか、情報屋ってそんなに景気のいい仕事なのか俺もやってみたいよ、或いはいい金づるでも見つかつたんか」

「そんなとこかな、被害者や目撃者から眼だし帽を被り六尺位で筋肉質、後の二人は衣服からチンピラ風としか分かつていない、現在田川は傷害事件の首領格と背格好が似ている」

「それでトッポイ奴らを片っ端から調べていたのか、だがデカ長さん、そいつ等までが店に来なくなってしまった、昨日なんか赤字だった」

「一刻も早く解決しようと捜査員全員が頑張っている、分つてくれ」

「いつだったかなーランチ食いに割烹いなかに行っただ、そうしたら板さんがあのキザ監察官が来たと言っていた。一人だったそうです、冷酒でそここの肴を摘んでいた。あの魔王の持ち主は誰かと聞いていた、私どものお得意さんですと答えました」

「どの誰とは聞かなかったのか」

「板さんも心得たもの、お客さんの個人情報になります喋られませんと言ったそう、その後無言で飲み摘んでいた、あの監察官何故に魔王の持ち主を聞いたのか」

「定か成る事は分からん、いつ吉祥寺に現れんとも限らないそれとなく注意してくれ、三十分だ」

誠一を促した。デカ長さん俺が払うをこのくらいならもっている。

「この次は何時になるか分からんがその時は小生が、ついでと言っちゃ何だがその日までにデカ長を一平と呼ぶよう練習しといてくれ」

「いいともデカ長さん、あいや一平殿」

誠一と別れた。少し早いランチ始っただろう昼飯でも食うとするか割烹いなかに向かう。

「おー一平さんランチですね、昼だ魔王はお預けやでと板さん」

昼少し前だ、お客さんはこれからと見えない、どこでも構いませんと言うのがカウンター席に座った。ランチメニューに漬け丼他二品と記されていた、迷わず漬け丼を女将さんに告げる。

「一平さん、こないだ例の監察官が来て困ったよ、根掘り葉掘り魔王の持ち主は誰かと聞くん、やむを得ず元警察官だと答えた」

「板さん構わんよ、事実そー何だから」

「連れの女は誰とかいつも連れて来ているのとか参ったよ、何も聞いていないので分かりませんここはお客さんが言わない限り名を始めプライバシーは聞きません、俺を誰か知っているな店の為にもならんと、もう脅しだよ」

「どうしました」

「分かりませんの一点張りに徹しました。知ってて喋らんとはと凄みも、職権乱用も甚だしい」

「こやつのやりそうな事だな、ありがとう」

「その日は花金だ、早く帰ってくれば良いと想っていた、外で待つ人もいたが四人テーブルを独り占め、でそんなやり取りがあつてはお客さんもおちおちしちやーおれん」

「結局どーになりました」

幾分納まったか、勘定と言い立ち上がった。

「私が相對します」

と上さんがレジに行った。

「勘定書きを見せました、なんだこれっぽっちかと尻より財布を出し一万円札で支払いした。お釣りを無造作に財布にしまい込み無言で出て行きました。一平さん驚くなかれ、財布の中身をわざとのように見せていた、三、四十万は入っていたと上さんが言う。刑事さんていつもこんな財布に入っているんですか一平さん」

「個々の事は分からんが小生は無理と言うもの、最近は高額現金は持たないでカードが多いんじゃないか、小生も数社のカードは財布に入れているが、その金額は無理、魔王や森伊蔵、獺祭を買い取る位の金額は入れているが」

「一平さんだつてそうだろう、キザ監察官たるやなぜに多額の現金を持ち歩いているのか」

この時一平のCPUは、悪だくみの為の現金ではなからうか、例えばマキを襲うように急遽チンピラを集める為にか、現金を見せればすぐに集まるだろう。

「さつきも言つた様に個々の事は分からない」

「そうだな聞かれても俺もそう答えるだろうな、この漬け井どうだい何時ぞや一平さんが言つてたろ、八丈の島寿司、それ風を作って今季からランチに加えた、種は醤油ベースのタレ漬けにシヤリは甘味を強くし酢をまぶし井に盛り付け

る、どうだいいけるだろう」

「板さんも研究熱心だな」

「今ではどこでもランチは流行っている、こーしないと来てくれんよ、バイト代位は何とかせんと」

「いやー美味いよ、マキヤのりにも言っとこ」

雑談を含め店を出たのは一時を大分回ってしまった。病院に着いた、入り口右手奥の方に喫煙所がある、村上捜査課長が見えた、一平が歩を進め始める、気付いたかタバコ持つ手を挙げた、同じように一平も手を挙げた。

「すいません時間より遅くなってしまった」

「一向に構いません、今中間テストが終わり門下生が押しかけてきている、俺の居場所がなくなりちよいと一息タイムです」

「何人で来ている、賑やかじゃないのか」

「行ってみたら分かる、本当に見舞いに来たかと疑うほど、交代で来ると言っている今日は七人だ、個室だからまだまだが相部屋だったら他入院患者さんにお叱りを被ること受け合い、一平さん今行かんで下さい。今行かれたら道場で人気のある指南役の一平さんだ、火に油を注ぐようなもん、賑やかさに拍車が掛かります。看護師さんが静かにしなさいと飛んでくるとも限らない。もう直ぐ稽古の時間です、引き上げる筈それまでここで缶コーヒーだけ飲んで下さい、今買ってきます」

「小生が買ってきます、砂糖抜きでよかったね」

「はいそうです」面倒おかけします」

一平が買ってきたコーヒーのプルトップをプシュンと音をさせ村上捜査課長が話し始めた。

「どう想います情報屋似の男とチンピラ二人、吉祥寺にはいないか、まだ三日目だが掠りもしない」

「小生もそー想っていたとこだ、何らかの当たりがあっても良い筈」

二人はそうこうしているとルパン三世が、俺が奴等を知っていると云わんばかりにテーマが鳴る。

「一平さん俺だよ誠一だ、一平さんだから言うんであつて頼むよ、意味ありな常連さんがどうもここん所歩きづらいと零していた。例の傷害事件を話したら、そうかチンピラ風かあの二人じゃねーかと言った、誰だと聞くとケンとアキと言つていた、暗がりでもカッパルを脅していた、てめーら何やってんだと凄んだら一目散だ、奴等ここん所二日三日見んな、その二人じゃねいか」

「フルネームでも分かれば照合してみるんだが」

「残念ながら分らん」

「ありがとう、ケンとアキだな記憶しとこう」

情報が分かり次第連絡入れてくれと言ひ電話を切つた。

「一平さん今ケンとアキと言つていたな、武蔵野署でかつあげ容疑で追つてると言つた。そいつらだな、だけどここん所とんとして現れないと言つていた、情報屋の田川も同様だ」

「雲隠れしたに相違ないな、でもな捜査課長、痛めつけるだけでいい殺すでないぞとマキと争っている時言つていた、それはマキにこれ以上は突つ込むな、さもないと警告したのではないか。あの女より強いんじゃないかと言つてたらしい、小生の推理とやらだ、その女は寺島加奈でありが田川とチンピラ二人と繋がっているんじゃないか」

「一平さん、俺も同じような事を」

病院の玄関が騒がしくなつてきた、門下生等が出て来た。一平さんはここにいて、そつと礼を言いに行つて来ると、箸が転がつても大騒ぎする彼女等、一平さん見かければ玄関先で騒ぐこと受け合ひ、じつとして下さいと捜査課長は皆の方に、おじさんまた来ますと個々に。

「あれだけ元気なら稽古もあーゆー調子でやつてくれりゃーいいんだが」

「今女子は一平さんでも扱いに手古摺るんですか、病室に行つてみましょう」

病室に入った二人はあつと声をあげ顔を見合わる、窓際に並ぶ花は分かるとしても果物を始め食べ物の数々。

「父っ様に一平、これら自分が責任もって自分が食べます、手付けないでね」

「看護師さんや先生に怒られると違う、病院食以外に食べたなら」

「父っ様、自分を誰だと思っているの、ちゃんど手筈は整っています」

とマキはベット下の様々な大きさのDB箱を指さした。

「どーりででっかな買物袋持っていた、これ等が入っていたのか」

「明日は代わりの門下生さんが来ます、食べ物は心配しなくてと言った、脱走はお預けにします」

父っ様は想わずモーと牛声を発す。

「食べ物かどーのこーのと言っているが自分を襲った奴等分かったの」

「今捜査中だ、詳しくは話せん」

「父っ様はいつもそれだ、自分が思うにチンピラは分からんが首領閣は監察官の情報屋田川に違いな、そいつらは不明の寺島加奈の居所も知っている、捜査状況を教えないと父っ様に一平、自分は食べ物を残しそいつ等探しに脱走するかもよ」

捜査課長の顔色を見ながら一平は話した。

「マキ！バックギヤのないのは分かっているがその包帯を早くとれる様に努めろ、そーすりゃー今まで通り小生の助手として働いてもらう、それでどーだ」

捜査課長は無言で肯くがマキは布団をひっ被ってしまった。

帳の頃退社時間を待って急ぎ来たのであろう、海老原幸子が大き目なレジ袋を持ち入って来た。海老原さんが来られた起きなさい、椅子の準備をしながら父っ様が声かける。

「初めましてピース王国の海老原幸子です、マキちゃんの様子はどうですか」

マキは獲物を得たかの如くベットにひよいと座った。

「幸子さんお見舞い有難うございます、派手に巻かれた包帯は目立つが自分はほれこのとおり元気そのもの、周りが煩くて敵わんのよ」

「マキちゃん分かるけど今はケガを直さなければ、皆は心配してるのよ」

「ほれ見る海老原さんに限らず誰だってそう思うよ」

「一平さんの仰る事でしたら聞いてくれるのでは」

それがーと一平は口籠りし言い始めた。

「さっちゃんが来てくれたので一安心だ」

海老原幸子はケーキと果物をテーブルに置いた、四人は雑談めいた話に暮れる。

でも少し気になる事があるんです捜査課長さん、一平さん聞いて下さい。

「気になる事とは」

「いつぶくの重臣の一人としてマキちゃんも聞いて下さい」

マキはベット脇にちよこんと座った、父っ様はお前は聞かんでいいと言った表情。

「書記官松下翔平さんがあのようになってしまう、今年は国王も来日される忙しさ頻りの毎日です、毎年春に職員補充はしています、その中の二人の男女が国王来日準備委員会に従事するよう配属された、どこの企業でも春には在り得る事」

「その二人が何か問題が」

「否、語学堪能パラオ語も日常会話は可能、大使ともども大使館には嬉しい限りの男女です、その二人の内の男の大河原健三、彼は数字の達人でもある五桁なら電卓不要直ぐ答えが出て来る。来日後の分刻みな日程や国王の立ち回り先の予算等の作業はスムーズ」

「イベントを行うにしても日程や予算が決まらなくては、良かったではないかスムーズに決まるとは」

「一平さん、三日かかる所を二日で済めば残った一日は他の作業が出来る。願い叶ったりです」
では何がかかりかと一平はさっちゃんに聞いた。

「余計な数字が見えすぎてしまうのです」

とさっちゃんは言った。